

今美術館に必要なこと 〈その二〉

三菱一号館美術館 館長 高橋 明也



国立新美術館外観

(2) 日本の現実を踏まえた美術館とは？

コレクションと美術館の切っても切れない関係を前回(2014年11月号)は書きました。パリのルーヴルやオルセー、ロンドンやワシントンのナショナル・ギャラリー、ニューヨークのメトロポリタン、マドリードのプラド、フィレンツェのウフィツィ、ウィーンの美術史美術館、ミュンヘンのアルテ・ピナコテーク…いくら書き連ねてもきりが無いほどに、欧米の大都市には大きな美術館があり、広大な展示室を何万点、何十万点という作品で埋めていることは皆さんよくご存知の通りです。

しかし、それに対して、日本の美術館、とりわけ公立美術館のコレクションは本当にささやかです。美術館がもともと明治期以降に整備されていった後発のシステムであるなかでも、公立美術館はさらに立ち遅れて、ようやく1970年代以降に各地に登場したにすぎず、最も早い公立近代美術館である鎌倉の神奈川県立近代美術館、通称「鎌近」にしても、1951年の開館です。2000年以上に渡る長い美術品コレクションの歴史があり、さらに近代の産業革命や帝国主義・植民地主義などの時代を経て一気に収集品を増やした欧米の美術館と比べるとは酷いものなのでしょう。

それでは、豊かな収集品を前提とする「古典的」な欧米型美術館と異なる「日本型」あるいは「脱・古典型」美術館は可能なのでしょうか？ここで古来からの日本における美術の鑑賞形態を考えてみると、「正倉院」のような官製保管庫は別格として、人々が美術的なものに接する公共的な場は

ほとんどが祭儀・宗教儀礼の場だったということが分かります。近世以降も、室町時代の東山文化や桃山時代以降の茶の湯の文化は典型かもしれませんが、美術は洗練された趣味で繋がった同好の士「数寄者」たちの間で共有される、どちらかと言えば「閉じた」サイクルのものでした。江戸時代の「粹」の美学も、それを理解できる「通」の人々の共通言語として成り立っていたので、大衆の美的趣味の最大公約数を収集・展示しようとする公共の「美術館」という発想からは遥か遠いところにありました。ましてや、日本の一般の生活者にとって「美」は、着物や器など、生活の中のむしろささやかな品々にあったわけです。

明治期の近代化政策以来導入された近代的“Museum”のシステムは、結局近代以前からの「見世物」や新時代の「博覧会」といった雑多な要素を併せ持つ折衷的施設となり、現在も多かれ少なかれその延長線上にあります。他方で、現代美術の世界では多くの新しい表現形式が登場し、デジタルなデータ社会の中で必ずしもオリジナルな「作品」を所有しなくても、アーカイブのような形式で「理念」と「仕様」だけをきちんと分類・管理すればよい、という考えも広がりつつあります。とはいえ、例えば六本木の国立新美術館などは、所蔵品をほとんど持たずに展覧会機能中心の運営に特化しているため、日本語名称は「美術館」としながらも英語表記では“The National Art Center”とうたっています。その混乱には、未だに進路を模索中の日本の美術館の現状がよく示されているのではないのでしょうか。